

近衛中学校 後期アンケート考察(前期アンケートとの比較から)

1. 学校教育目標【自主自律そして自治】への到達度

「社会や人とのつながりを大切にし 可能性を最大限に探究する たくましく生きる生徒」

Q, 地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか(社会や人とのつながりを大切に にする)				
	当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	前期計	後期計
全国	12.6	31.2	43.8	
京都市	11.5	29	40.5	
生徒	26.2(前期)→25.0(後期)	37.8(前期)→43.4(後期)	64	68.4

【考察】

7月に学校運営協議会との連携授業「防災学習」において、生徒の意識向上が見られたのを受け、2学期は1, 2年生では校外学習(校区内)や、ゲストティーチャーを招いての学習などがあり、生徒たちが社会や人とのつながりを意識していることが考えられる。

Q, 家で自分で計画を立てて勉強をしていますか(可能性を最大限に探究する)

	当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	前期計	後期計
全国	19.4	44.1	63.5	
京都市	16.6	44.2	60.8	
生徒	17(前期)→22.1(後期)	37.7(前期)→37.3(後期)	54.7	59.4

【考察】

全学年が取り組んでいるスケジュールノートの活用を生徒に日々、働きかけている。2学期に入り、意識する生徒は増えてきたが、全国、京都市の平均に満たない状態である。やらされる勉強ではなく、自ら目標を立て、計画する力を身に付けて欲しい。

Q, 難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦している(たくましく生きる)

	当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	前期計	後期計
全国	20	45.9	65.9	
京都市	16.8	44.8	61.6	
生徒	20.1(前期)→22.9(後期)	47.8(前期)→55.7(後期)	67.9	78.6

【考察】

例年、京都市が全国に比べ低い項目である。近衛中の生徒には、「失敗は成長の証」と学年、部活動等で教職員が同じスタンスで呼び掛けている。2学期に入り、多くの生徒が意識するようになってきている。

2. 自己有用感について

(保護者、教職員アンケート含む)

Q, 自分には良いところがあると思いますか(生徒) Q, 学校で子どもの自己肯定感は育まれている(保護者) Q, 生徒の自己肯定感を高めるように指導方や活動の場の提供に努力している(教職員)				
	当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	前期計	後期計
全国	34.5	41.7	76.2	
京都市	31.6	42.5	74.1	
生徒	36.8(前期)→38.1(後期)	40.8(前期)→42.1(後期)	77.6	80.2
保護者	31.3(前期)→33.3(後期)	60.2(前期)→53.3(後期)	91.5	86.6
教職員	64.7(前期)→61.1(後期)	35.3(前期)→38.9(後期)	100	100

【考察】

例年、京都市が全国に比べ低い項目である。近衛中は生徒指導の三機能の取組を進め、自己決定の場、自己存在感、共感的人間関係を授業や生活の場面で、それぞれの教職員が生徒の「自己指導力の育成」を図っている。2学期以降、教職員の取組が少しずつ生徒に反映されてきている。

Q, わたしは将来の夢や目標を持っている(生徒)
 Q, 子どもは将来の夢や希望を持っている(保護者)
 Q, 生徒は将来の夢や希望を持っている(教職員)

	当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	前期計	後期計
全国	40.5	28.1	68.6	
京都市	37.3	27.2	64.5	
生徒	40.6(前期)→44.6(後期)	31.3(前期)→29.0(後期)	71.9	73.6
保護者	29.3(前期)→29.9(後期)	46.3(前期)→49.7(後期)	75.6	79.6
教職員	12.5(前期)→5.3(後期)	75(前期)→94.7(後期)	87.5	100

【考察】

例年、京都市が全国に比べ低い項目であるが、近衛中は向上してきている。昨年度から小学校、中学校、高校と持ち上がる「キャリア・パスポート」を活用し、義務教育の出口である中学校の進路実現につなげ、将来の「なりたい自分」に近づけるように働きかけをしていく必要がある。

3, ICTの使用について

(保護者, 教職員アンケート含む)

Q, 学習の中でコンピューターなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか(生徒)
 Q, 子どもはコンピューターなどのICT機器を学習に役立てている(保護者)
 Q, 生徒がコンピューターなどのICT機器を学習に役立つように授業で使用している(教職員)

	当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	前期計	後期計
全国	60.4	32.8	93.2	
京都市	57.7	34.6	92.3	
生徒	59.1(前期)→58.2(後期)	32.2(前期)→32.6(後期)	91.3	90.8
保護者	17.3(前期)→29.3(後期)	54.3(前期)→56.0(後期)	71.6	85.3
教職員	31.3(前期)→50.0(後期)	43.8(前期)→38.9(後期)	75.1	88.9

【考察】

全国、京都市に比べ若干低い数値になっている。現在GIGAスクール構想のもと、端末の家庭への持返りを始めている。2学期に入り、端末の使用の頻度が増え、保護者の認識も高まり、教職員の意識も向上してきている。

Q, 携帯電話・スマホ・コンピューターの使い方について学校や家の人と約束したことを守っている(生徒)
 Q, 子どもは携帯電話・スマホ・コンピューターの使い方について約束したことを守っている(保護者)
 Q, 生徒は携帯電話・スマホ・コンピューターの使い方について学校で約束したことを守っている(教職員)

	当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	前期計	後期計
全国	30.9	37	67.9	
京都市	25.7	39.9	65.6	
生徒	40.5(前期)→46.0(後期)	44.5(前期)→39.7(後期)	85	85.7
保護者	21.7(前期)→20.2(後期)	48.2(前期)→49.7(後期)	69.9	69.9
教職員	26.7(前期)→26.3(後期)	53.3(前期)→63.2(後期)	80	89.5

【考察】

生徒は携帯電話・スマホ・コンピューターの使い方について、85.7%が約束を守っていると答えているが、保護者については守れているが69.9%と隔たりがある。生徒、家庭、学校と正しいICT機器の使い方をしっかり話す必要がある。教職員からは、端末の持返りを契機に、生徒への注意喚起が増え、意識の向上が見られる。